

# ワイカート・レポートの方法論 ——幼児教育カリキュラムの追跡比較研究(II)——

平松 芳樹 北川 歳昭  
Yoshiki Hiramatsu Toshiaki Kitagawa

## 1. はじめに

本稿は、ワイカート・レポート (Schweinhart et al., 1986) の研究方法について、抄訳的に紹介するものである。ワイカートらの研究は、三つの異なった幼児教育カリキュラムについて、それを同一組織で運営する教育機関で実際に教育活動を行なって、その効果を比較したということに画期的な意義があり、方法的にも他に類を見ない独創的なものであるといえる。しかも、幼児期のみならず、学童期から青年期にかけても追跡調査を行なうように長期的視野に立つもので、アメリカ合衆国内でも第一級の高い評価を受けている。わが国でも幼児教育のあり方が問われている現在、この研究の示唆するもの大である。以下に抄訳を掲載するが、「ワイカート・レポートの概要とその意義」(加藤・平松, 1987) および「ワイカート・レポートにおける『結果』について」(北川・加藤, 1987) も参照されたい。

## 2. ワイカート・レポートの手續と方法

### (1) 各プログラムの共通の特徴について

この研究における三つのプログラムは、同じ研究計画の一部として行われた。監督者(ワイカート)、財源、人事の方針、学校組織体制が共通していた。三つのプログラムは、二つの構成要素からなっていた。すなわち、教室での保育活動と家庭訪問である。保育活動は毎週月曜から金曜まで毎日2.5時間行われ、家庭訪問は2週間ごとに、子どもとその母親に対して90分間行われた。家庭訪問の時、教師は、教室で実行されているカリキュラムのやり方に合う学習をするよう母親を促した。1967年から1970年の間にカリキュラムが実施されたクラスは、1クラスを例外として、15人か16人の3、4歳児からなっていた。すなわち、1969～1970年のハイスコープのクラス(第2波と3波を一緒にして)は、13人であった。(表1では11人となっているが、それは後で2人の子どもを省いたからである。というのは、2人の子どもは、サンプルの選択のところで分かるように、不適格であったからである。)教師対子どもの割合が、1:8になるよう各クラスに2人の教師が割り当てられた。さらに、各クラスにはバスを運転するアシスタントがいた。そしてまた、各クラスには女性の特殊教育専攻の学生がおり、彼女たちは、子どもたちの世話を、特に、学校からの行き帰りの時のバスの乗り降りや遠足などの世話をすることによって履修単位をもらった。

プログラムが実施された3年間の教師の職には、教員の資格を持つ11人の女性が就いた。彼女たちの大部分が修士号を持っており、その他も学士号を持っていた。アシスタントはその計画の間中、各カリキュラムとも同じ人だった。ハイスコープとディスターのカリキュラムは、計画の2年目に新しい教師

に代った。ディスターの一人の教師は、計画の三年目の初めに復職した。教師たちは、みんなカリキュラムを成功させようという強い意欲を持っていた。彼女たち一人一人の経験の記録については、ワイカート (Weikert, 1972) の論文を参照されたい。

各々のカリキュラムの教師たちは、毎日の評価と保育活動の計画、活動の反省、一人一人の子どもの進歩のことなどに携わっていた。しかし、三つのカリキュラムの合同会議はもたれなかった。監督者は、三つの全てのチームに指導を行い、彼らカリキュラムのねらいを持続するよう援助し、一人一人の子どもたちの要求に応ずるよう毎日の評価と計画を参考にした。したがって、監督者あるいはスーパーバイザーは、それぞれのカリキュラムに対して意見を述べ、カリキュラムがうまくいくかどうかやり方を考えた。家庭訪問が終わった後で、教師は子どもの活動について記述し、その進歩を評価して、家庭訪問の記録を作成した。そして、監督者とともにこれらのレポートについて評価した。各々のプログラムは、クラスを持たないスタッフや、外部のコンサルタントたちも教室を参観し、教師や監督者に会って、カリキュラムが忠実に履行されていることを度々調査した。

ディスターのカリキュラムを行うチームは、ベライター、エンゲルマンのカリキュラム開発チームに雇われて訓練を受けたイリノイ大学のコンサルタントたちからトレーニングを受けた。ハイスコープのカリキュラムを行うチームは、カリキュラムの開発に従事し、よりよいカリキュラムに仕上げるハイスコープカリキュラムコンサルタントたちと一緒に仕事を続けた。ナースリースクール・カリキュラムを行うチームは、伝統的な幼児教育のトレーニングや、子どもたちとの経験、そして教師の直観（それらは、すべて保育所保育の中で、高く評価されているものだが）にそって、彼女たち自身でカリキュラムを開発した。

これらのプログラムには、イプシランティ市内でお互いが2マイル以内の距離にある2つの校舎の1部屋があてがわれた。この計画の1年目には、一方の校舎は、午前中はハイスコープが使い、午後はディスターが使った。もう一方の校舎は、ナースリースクールおよびこの計画の運営スタッフたちにあてがわれた。続く2年目は、ハイスコープとナースリースクールが一方の校舎で実施され、他方の校舎では、ディスターが実施された。ディスターが椅子とテーブル、そして静かな環境が欲しいということから校舎を変更したのである。一方、ハイスコープとナースリースクールは、豊富な素材と備品を必要とし、共に分かちあった。各々のプログラムを受けた子どもたちは、行き帰りとも別々のバスに乗るのでグループ間の接触はなかった。

## (2) サンプルの選択

本研究の下記選択基準を満たしたのは68名の子どもたちであった。

1. ミシガン州イプシランティに居住している
2. 1967年から1969年の間に3歳になる
3. 社会経済的地位の低い家庭に住んでいる
4. 知能テストの成績によると学業不振の危険性がある

イプシランティの公立学校区の市勢調査にもとづいて3歳児の母集団が作られた。というのは、この計画を最初に指導したのはイプシランティ公立学校組織が市の行政機関であったからである。この計画はその後、1970年に新しく組織されたハイスコープ教育研究財団の一部になった。イプシランティは、中西部の小さな町（1970年の人口62,732人）で、ミシガン州の南東三角地にあって、アメリカ自動車工場の多くが集中している。イプシランティの歴史は、「生活の変化」というモノグラフ (Berrueta- Clem-

ent et al.,1984,pp.12-18) に紹介されている。

研究に参加した子どもたちは、1967年から1969年の間に3歳になるイブシランティの3歳児集団の中から選ばれた。(以前の報告の中の第5波から第7波は本研究の第1波から第3波に相当する；以前の報告の第8波は本研究計画に含まれていない) 研究に参加した子どもたちは、1964年から1966年の間に生まれ、1967年から1970年の間に3歳か4歳でプリスクールプログラムに加わった。そして、1974年から1976年の間の10歳時および1979年から1981年の間の15歳時にインタビューに答えた。

家族の社会経済的地位を測定するために、1967年から1969年の間の毎年9月に、イブシランティの3歳児の両親を対象にアンケートが実施された。アンケートによって以下のことが確認された。

- 1) 主たる所得者の職業 (両親のいる家族は父親, 片親家族は母親), コードは: 1 = 失業者, 2 = 非熟練者, 3 = 半熟練者, 4 = 熟練者, 5 = 専門職
- 2) 両親の教育年数 (両親のいる家族は平均, 片親家族は母親の教育年数)
- 3) 家庭での一人当りの部屋数

事実上、このサンプルの父親と母親はすべて非熟練労働者として雇われていた。したがって、このサンプルの職業指標は「失業中または非熟練労働者」ということになる。

データの解析では職業、教育歴、一人当りの部屋数を標準化した。一人当たり部屋数の数値は2で割って、他の2つの要因の半分の重みづけにした。この手続きによって1967年から68年の調査ではイブシランティ学区の家族の社会経済的地位スコアは、5.3から16.8の間に分布した。この尺度が11以下であると貧困家庭とされる。

1967年から1969年にかけて毎年9月に、これら家族の3歳児にはスタンフォード・ビネー知能検査(L-M型; Terman & Merrill,1970) を実施した。子どもたちのIQは60から90の間で、身体的障害はみられない。本研究のプリスクール・プログラムに参加したサンプル集団の平均IQは78.3であった。これからすると、本研究の子どもたちは、もしプリスクール・プログラムに参加していなければ、落ちこぼれの危険のある学習遅滞者に分類されたかもしれない。

基準に合った子どもたちのうちの何人かは、すでに他の就学前教育あるいは児童養護プログラムに参加していた。このため、それらの子どもの両親はこの研究に参加することを辞退した。何人かは家族が学区外へ移住したためこのプログラムから抜けた。初めに基準を満たしていた2人の子供は、後で不適合とわかった。なぜなら彼らの家族がより高い社会経済的地位に昇格していたからである。かくして、プリスクール・プログラムを完了した子どもたちは、計68名になった。

### (3) カリキュラム・モデルへの割り当て

毎年、新しい波として入ってくる子どもたちは、ランダムに3群に振り分けられたが、プログラムの開始時に、人種、性、平均IQで3群が同等になるよう再振り分けされた。3グループはさらに、ランダムに3つのプリスクール・カリキュラム・モデルに割り当てられた。ランダム割り当てでなかったのは兄弟である場合だけで、彼らは同じカリキュラム・モデルに割り当てられた。これは家族の中で2つのカリキュラム・モデルの効果が混乱することを防ぐためである。この手続きによって68人の子どもたちのうち9人が影響を受けた。

カリキュラム・モデルの割り当て手続きは、サンプルの各メンバーがどのカリキュラム・モデルにも割り当てられるチャンスが均等になるように計画された。使用された技法は本質的に各グループに均等な機会が保たれるマッチング技法であり、そのグループが続いている間キーとなる背景の特質をできるだけ

同じように保つものである。この技法は、少ないサンプルでの単純なランダム割り当てにふさわしいものであろう。というのは、最初からグループの特徴が異なっていたのではカリキュラム効果の影響があまりにないので、この技法はこのような危険性を低減するからである。

第1波では、1つの子どもグループ (n=9) だけが3歳と4歳の時プログラム (ハイスコープ・モデル) に参加した。他の2グループの子どもは、第1波では3歳の時にはプログラムはなにも経験しないで4歳の時だけディスター (n=7) と、ナースリースクール (n=7) プログラムに参加した。この食い違いは「ペリー幼児教育計画」の第4波の子どもたちを今回の研究へ移行させたために起きたのである。プログラム存続期間が、1年であるか2年であるかという要因が、カリキュラム効果の比較を混乱させる原因となった。しかしこのことは前の研究で問題のないことが証明された。すなわち、1年間のプログラムと2年続きのプログラムとの結果に差のないことがわかった。(たとえば, Berrueta—Clement et al., 1984, pp.90—91, 108参照)。そして、データを広い範囲で予備分析してみても、本研究におけるプログラムの期間の効果に差がみられなかった。ここに提示した結果はすべて、2年のプリスクール・プログラムに参加していた子どもの中の下位サンプルに対しても、同じようにうまくいくことが見出された。

#### (4) 最初のサンプルとグループの特質

表1は、プログラムサンプルの中で、プログラムに登録された68名の子どもたちとその家族の特質をリストした。65%は黒人で、54%は女性である。家族の生活は貧困で、3分の1の家庭は生活保護を受けている。75%の家庭には父親がいる。父親の98%、母親の38%は非熟練労働の職に就いている。父親の教育歴は平均9年で、母親は10年である。一世帯当り人数は平均6.7人で、1人当り部屋数は1である。

表1はまた、プログラムに参加した3つのカリキュラム群の間の特徴の比較が示されている。群間の類似性は、統計的に有意な差もないし、実質的な差もないことによって示される。しかし群間の実質的な差は20%以上もあった。統計的有意水準を明示する基準は、このレポートを通じて、両側検定で.10以

表1 3歳時および15歳時のプログラム参加者の特徴

特 徴	合 計		ディスター		ハイスコープ		ナースリースクール		p	
	年 齢	3歳	15歳	3歳	15歳	3歳	15歳	3歳		15歳
人数		68	54	23	18	22	18	23	18	—
第1波		27	23	8	7	11	9	8	7	
第2波		19	15	7	6	5	4	7	5	
第3波		22	16	8	5	6	5	8	6	
15歳時の残存率			79%		78%		82%		78%	—
黒人率		65%	71%	66%	67%	77%	78%	52%	67%	—
女性率		54%	53%	52%	44%	59%	61%	52%	55%	—
家族の社会経済的地位		8.8	8.8	8.7	8.7	9.0	8.8	8.9	8.8	—
片親の家庭		26%	28%	35%	39%	30%	31%	14%	12%	—
父親の有職率		98%	97%	94%	92%	100%	100%	100%	100%	—
母親の有職率		38%	39%	44%	44%	32%	33%	38%	38%	—
父親の教育年齢		9.0	9.2	9.2	9.2	9.6	9.9	8.4	8.5	—
母親の教育年齢		10.0	9.8	9.7	9.6	9.3	9.1	10.9	10.9	.02
1世帯の人数		6.7	6.8	6.8	6.5	6.1	6.3	7.1	7.6	—
一人当たりの部屋数		1.0	1.0	1.0	1.0	1.1	1.1	0.9	0.9	—
プログラム参加時の子どものIQ		78.3	78.6	78.8	79.1	77.5	77.8	78.6	79.0	—

下、すなわち10分の1以下の生起率である。統計的有意水準は慣例では、このような研究では.05以下である。小さいサンプル数では、数値上の群差があってもこの基準に合わないことがあるということを留意すべきである。

カリキュラム群は、プログラムに参加した子どもの性、家族の社会経済的地位および子どものIQという重要な特徴で類似していた。しかしながらナースリースクール群は、他の群、特にハイスコープ群より当初から有利な面がいくつかあった。それは母親の学歴が高レベルで、片親家庭がより少ないことと、黒人が少なく白人が多いことなどである。

#### (5) 15歳までの減少

プログラムサンプルの68名のうち54名が15歳時にインタビューを受けた。残った率は79%である。3歳から10歳までの前のデータ収集は、プリスクールプログラムもしくは学校において集められ、90%以上残った。

15歳時に残ったプログラム参加者のメンバーの特徴を表1の中に示した。3歳時の特徴と比較すると、15歳時のサンプルがどの項目でも3歳のサンプルと実質的には等しいことを示している。さらにまた、15歳時に残ったカリキュラム群のプログラム参加者の特徴は、最初のカリキュラム群の特徴ととてもよく似ていた。言及すべき違いは、15歳時にナースリースクール群に白人より黒人が多く残ったことで、黒人が52%から67%に増えたことだけである。これは、最初の時より15歳児の黒人の割合が3グループ間でより類似した、というよい効果が得られた。

表1の分析から、ハイスコープ群とディスター群のどんな結果の差もたぶんプログラム参加者の特徴に差があったためと考えられるものはないと結論される。しかしながら、他の2群よりもナースリースクール群に有利な結果がいずれも、母親の教育程度の高さによっているということもありうる。そして、結果の差が3歳の時には測定されていなかった要因とか、3歳から15歳までの成長過程にたまたま生じたことが背景となる特徴の差として影響したということもありうることを考慮しなければならない。

#### (6) 分析方法

このレポートを通じて用いられた主たる分析法はカリキュラム群間の比較である。補助的分析法はIQについての調査結果を縦断的にみるために用いられた。これはすべてのカリキュラム研究の全サンプルを最初のペリー幼児教育計画の統制群と比較することであった。

#### (7) カリキュラムグループの比較

カリキュラム研究の目的は、別個のカリキュラムモデルの効果を互いに比較することである。したがってこの研究では、3つのプリスクールカリキュラムモデルの結果の差について主たる分析検査を行なった。結果がカテゴリーに分けられる変数の場合、各群毎にパーセンテージまたは頻数で示し、群間の差の評価にはカイ二乗検定が用いられた。結果が連続的変量になる場合は、片側の分散分析によって評価し、各群の平均値を示すと同時に群間の差の有無を検定した。

各群は最初の時も15歳の時も子どもの人数がほとんど同数だったので、重みづけしない分散分析法を用いることができた。背景となる特徴がグループ間で等質であることも、この単一主効果モデルを用いることを正当化した。しかしながら、性、人種、母親の教育程度の影響を統制するために、結果は一連の二要因分散分析法でより厳密な検定を行なった。サンプルサイズが小さいためにこれらの調整は一回の多要因分析ではなく、一連の二要因分析を次々に行なったのである。本論文に報告した統計的に有意な主な結果は、このような分析によって確かめられた。

**(8) プリスクール教育を受けない統制群**

本研究の知的達成を広い視野で見ると、3つのカリキュラムの子どもの全サンプルをプリスクールプログラムを経験したことの無い同じ社会の子どもたちのサンプルと比較することにした。これら「ノンプリスクール」の子どもたちは、4年前にカリキュラム研究が始められた当時、イプシランティの3歳児から集められた。そしてこの子どもたちはペリー幼児教育計画の統制群として選ばれた。家族の社会的経済的地位は低く、3歳の時のスタンフォードビネーで60から90の間のIQであった。両グループの背景となる特徴を表2に要約する。カリキュラム研究のサンプルは、イプシランティの全学区から抽出されたのに、ペリー幼児教育計画はひとつの小学校の通学区域だけが対象であった。その結果、統制群は黒人の子どもだけで、本研究のサンプルよりいくらか不利な立場にある。しかしながら、二つのグループの3歳時のIQは等しい。

ペリー幼児教育計画と本研究とにおける子どもの発達を追跡するのに用いられた測度が違っていたため、統制群との比較には標準化された知的達成測度であるIQのみが用いられた。本研究のプログラムに参加した子どもたちと同じ地域に住むやや不利な条件にある子どもたちがどの程度異なっているかを証明するために、本研究の実験群とペリー統制群との比較が行なわれた。

**表2 実験群と統制群の基礎環境特徴**

特 徴	実 験 群	統 制 群	p
	プリスクール教育を受けた子どもたち	プリスクール教育を受けなかった子どもたち	
人数	68	65	
黒人の%	65%	100%	.05
社会経済的指標	8.8	7.9	.05
母親の教育歴	10.0	9.4	
3歳時の子どものIQ	78.3	78.5	

**(9) プリスクールカリキュラムの結果の測定**

カリキュラム研究での結果については、次のものを含んでいる。全期間を通じての知的達成と学業達成、15歳時の自己報告による様々な社会的行動や態度の側面、すなわち少年非行、家族関係、社会的活動、学校での行動や態度、精神的健康、就職、経済状況などである。

この研究で、知能テストを使用した。我々はこれを生得的な能力を測っているとは考えていない。本研究の視点は、その測定された能力が経験によって形成されうるところにある。知能テストは、貧困な子どもたちの文化的体験とは関係のないいくつかの課題を実行することによって測定される。それにもかかわらず、カリキュラム研究に知能テストを使うことの論拠は、知能テストが、典型的な学校環境が要請するものに応ずるよう子どもに準備させるという点で、プログラムの有効性の良い指標になるであろうからである。ハイスコープとナースリースクールのプログラムは、典型的な学校環境において成功するための能力以上のものを子どもに与えようと努めていることを心に留めておくべきである。つまり、これらのプログラムでは、子どもたちに主導性を発揮させ、問題を解き子どもたちの創造的な潜在力を用いるよう励ますのである。しかし、プリスクールプログラムは、ほとんどの子どもたちが典型的な学校環境の中で多くの時間を過ごすことになる、その後の人生の期間のために子どもたちをどのくらい知的および社会的に準備させるかという点で評価されねばならない。

子どもたちには、いろいろな年齢で知的達成の諸側面を測定するいくつかのテストをされたのであるが、この報告では一般的能力の測定だけに焦点を合わせる。すなわち、スタンフォード・ビネー(Terman & Merrill, 1970) およびウエクスラー児童用知能検査すなわちWISC (Wechsler, 1949), 学業成績(カリフォルニア・アチーブメント・テスト, Tiegs & Clark, 1963), 実社会が要求するものを処理する能力(成人用達成レベル調査表, アメリカ大学テストプログラム, 1976)である。

前にも触れたように、スタンフォード・ビネーはすべての子どもにプログラムに参加する前に実施された。それは、テスト得点の低い者をサンプルに入れるかどうかの基準として使用された。その次にプログラムの最初の年と次の年の春に、熟練した検査者によって一人ひとり個別に実施された。入学後は幼稚園から小学校2年まで毎年春にスタンフォード・ビネーが個別にテストされた。子どもたちは10歳の時スタンフォード・ビネーを受けた後、下位尺度得点から洞察を得るためにWISCを受けた。カリフォルニア・アチーブメント・テストは、毎年春にハイスコープ財団のスタッフが学校で1年生と2年生の時に、小グループで実施した。

15歳の時の資料には、成人達成レベル調査(APL)が含まれていた。APLは学生用に開発した多肢選択テストで、成人教育プログラムとして現代社会の教育的経済的成功に必要なとされる技術を査定するために作られたものである。APLで測定された職務上の能力は、5つの知識領域(社会資源、職業の知識、消費者経済、健康、政治と法律)に対する5つの技術(事実と用語の同一視、読み、書き、計算、問題解決)の応用を含むものである。たとえば、職業的知識についての読みの項目では、広告の必要性の理解についての質問があり、政治と法律の問題解決の項目では、当該行為の合法性を決定する質問に答えるものがある。下位尺度得点は各々の技術と内容の領域に分けられ、合計得点に合算されて得られる。一般の知能テストのように広範囲でもないし、学校の学力テストのように的をしぼったものでもないが、それにもかかわらず、APLは、学校で学んだ技能を成人の生活に必要なとされることに応用する際に発達させてきた青年の実社会での能力について我々に洞察を与えてくれる。

カリキュラム研究においては、15歳時の自己報告という手続きで、少年非行とその他の社会的行動の状況が測定された。少年非行の自己報告は、しばしば少年非行の研究者に使われている。(たとえばEmpey, 1978参照)。自己報告手続きは、非行行為すべてを測定しようとするが、それに対して、逮捕の割合は時々警察の回答に限定されるということが報告されている。使用した少年非行尺度は、ミシガン大学社会調査研究所のマーチン・ゴールドの調査研究センターの業績に由来している。そしてそれは、Bachman & Johnston (1978)による将来予測調査で使われた。この調査のその他の項目もまた使われた。態度と精神的健康の調査のために前に開発されたいくつかの尺度もまたこの研究に使われた。知覚された統制の位置(Bialer, 1965), 自尊心(Rosenberg, 1965), そして教師と学習に対する態度(Arlin & Hill, 1976)などである。

表3に本カリキュラム研究に使われたすべての尺度、テスト得点、サンプルとなった子どもの人数を示した。

#### (10) 本研究の限界

本研究の調査結果は決定的ではないと警告しておきたい。しかし、同時にこの結果は、プリスクールカリキュラムの差の起こり得る効果を示唆しており、これは考慮されるべきである。本研究は、3つのよく用いられているカリキュラムモデルを非常によく似た条件のもとで操作して、その効果を比較したものである。調査結果は、サンプルで用いたような子どものためのカリキュラムモデルの満足のいく改

表3 プリスクールカリキュラム研究の測定スケジュール, 3歳から15歳

年 齢	学 年	測 定 尺 度	人 数
3	プロジェクト参加時	スタンフォード・ビネー	68
4	プリスクール1年次	スタンフォード・ビネー	43
5	プリスクール2年次	スタンフォード・ビネー	58
6	幼稚園	スタンフォード・ビネー	61
7	1年生	スタンフォード・ビネー	64
		カリフォルニア・アチーブメント・テスト	64
8	2年生	スタンフォード・ビネー	67
		カリフォルニア・アチーブメント・テスト	65
10	4年生	WISC	35 <sup>a</sup>
15	9年生	成人用達成レベル調査表	55
		少年非行	54
		家族関係	54
		活動性	54
		精神的健康	54
		学校での態度	54

<sup>a</sup> 第1波ではテストされなかった。

訂版を越えて一般化することはできない。カリキュラムモデルの他の満足のいく改訂版に対して結果を一般化するためには、他のやり方とモデルの効果を同じだと仮定しなければならない。個々の教師または教育集団の特質と関係なく、公式にみても非公式にみても、実際に行なわれたプログラムは、記述されたカリキュラム実施要項を忠実に再現していたということを示していた。詳細はワイカートら (Weikart et al., 1978) 参照。それぞれのカリキュラムモデルはただ2人から5人までの教師によって実施された。しかし、いくら教師の特性による効果があるにしても、本研究は理想的なカリキュラムの実施を明らかにすることができる。

本研究の限界は、そのサンプルサイズの小さいことである。3グループに分けられ、それぞれが異なったプリスクール・カリキュラム・モデルを経験したのであるが、15歳の時点では52人しかいなかった。このサンプルが小さいという理由で、用いられた技法では統計的有意水準に達することがかなり困難になった。したがって、グループ差が30%になっても統計的有意水準に達しなかった。きっちりとした実験的コントロールと注意深くコントロールされた処理、そしてそれを10年間にわたる縦断的な追跡をするために、サンプルの規模が小さくなるのはやむをえなかった。

どんな研究もまちがうという危険を除去して結論をだすことはできない。それぞれのカリキュラムモデルに1,000人の子供と100の教育集団で実行した研究でさえ、特定のカリキュラムモデルを実行するための特種な教育集団あるいは教師ではないかといわれるリスクを完全に除くことはできないだろう。カリキュラム研究に関する限りでは、どんなカリキュラムが典型的なのかということだけでなく、カリキュラムによって何ができるのかということを知ることもまた価値があるのである。

### 3. ワイカート・レポートの方法論についての考察

ワイカート・レポートの方法論について抄訳を紹介してきたが、長期的視点から実によく準備され、方法的にもよく吟味されている研究である。しかしなお次の諸点に疑問が残る。

- (1). 性格検査または親子関係の検査が実施されていないこと。



群間の等質性が検討される際に、IQと家庭的環境面に差がないことは強調されているが、子どもの性格の記述がないことはおしまれる。また、貧困家庭であるから放任されていることは予想されるのであるが、親子関係とくに母子関係の問題についての調査がないことも不思議に感じられる。15歳の時の少年非行とも大いに関連がありそうな項目である。

(2). 統制群についての記録が乏しいこと。

統制群の記録が対応して効果の判定が明確になるはずであるが、IQだけにかたよっている。15歳時のAPLや自己報告のデータがあることが望ましい。

(3). 知能検査の一貫性

スタンフォードビネー知能検査を中心に実施されているが、10歳時だけWISCが使用されている。ウエクスラー式の幼児用WPPSIを使用することを考慮してもよかったと考えられる。

## REFERENCES

- American College Testing Program. (1976). *User's guide: Adult APL Survey*. Iowa City, IA: Author.
- Arlin, M., & Hill, D.A. (1976). *Arlin-Hill Survey*. St. Louis, MO: Psychologists and Educators.
- Bachman, J.G., & Johnston, J. (1978). *The Monitoring the Future questionnaire*. Ann Arbor: University of Michigan Institute for Social Research.
- Berrueta-Clement, J. R., Schweinhart, L. J., Barnett, W. S., Epstein, A. S., & Weikart, D. P. (1984). *Changed lives; The effects of the Perry Preschool program on youths through age 19* (Monographs of the High/Scope Educational Research Foundation, 8). Ypsilanti, MI: High/Scope Press.
- Bialer, I. (1961). Conceptualization of success and failure in mentally retarded and normal children. *Journal of Personality*, 29, 301-333.
- Empey, L. T. (1978). *American delinquency—Its meaning and construction*. Homewood, IL; Dorsey Press.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Schweinhart, L. J., Weikart, D. P., & Larner, M. B. (1986). *Consequences of three preschool Curriculum models through age 15*. Early Childhood Research Quarterly, 1, 15-45
- Terman, L. M., & Merrill, M. A. (1970). *Stanford-Binet Intelligence Scale, Form L-M: Manual for the third revision*. Boston: Houghton Mifflin.
- Tiegs, E. W., & Clark, W. W. (1963). *California Achievement Tests: 1957 edition with 1963 norms*. Monterey, CA: California Test Bureau.
- Wechsler, D. (1949). *Wechsler Intelligence Scale for Children*. New York: Psychological Corporation.
- Weikart, D. P. (1972). Relationship of curriculum, teaching, and learning in preschool education. In J. C. Stanley (Ed.), *Preschool programs for the disadvantaged* (pp.22-66). Baltimore, MD: Johns Hopkins University Press.
- Weikart, D. P., Epstein, A. S., Schweinhart, L. J., & Bond, J. T. (1978). *The Ypsilanti Preschool Curriculum Demonstration Project: Preschool years and longitudinal results* (Monographs of the High/Scope Educational Research Foundation, 4). Ypsilanti, MI: High/Scope Press.